

## 意味理解の哲学的説明は形而上学を前提しないのか？

葛谷潤（東京大学）

近年、ピーコックは2019年の著作『形而上学の優位性』のなかで、意味についての理論は形而上学を前提するという自らの見解を、意味についての理論が形而上学に先行するというダメットの「意味第一テーゼ」に対置した。しかし重要なのは、ピーコックは自身の立場を、(大きな共感を表明しつつも)『形而上学を第一に置く』におけるデヴィットの見解からも区別していたという点だ。ピーコックによれば、両者はその根拠づけにおいて大きく異なる。つまり、デヴィットが認識論的論点——私たちがよりよく知っているのは世界と思考・語りのどちらか？——に依拠しているのに対し、ピーコックはメタ意味論的論点——私たちの思考・語りの志向性はどう説明されるべきか？——に依拠している。そして、エヴァンズやピーコックは、まさにこの後者の軸においてダメットと対決したのだった。さて、フッサール現象学もまた、ある種の「意味第一テーゼ」を主張するものとして解釈できる。本提題ではエヴァンズ・ピーコック的見解をダメット・フッサールの見解への対案として提示することで、両者の可能性を吟味する手掛かりとしたい。